

堺利彦——初期社会主義の思想圏
目次

第I部 初期社会主義の思想圏

〔プロローグ〕 緒言 …………… 堀切利高 2

第一章 幸徳秋水と堺枯川——平民社を支えたもの …………… 山泉進 4

はじめに 4

一 秋水の不平 8

二 秋水の社会主義 15

三 枯川の不安 17

四 枯川 of 社会主義 25

おわりに 29

第二章 堺利彦の思想形成と非戦論——その平和的秩序観を中心に…………… 大田英昭 30

はじめに 30

一 堺における最初の精神上的の「革命」——「平和なる小家庭」 32

二 「家庭」のユートピアと平和的秩序の構想 38

三 資本主義・国家・帝国主義の暴力に対する批判 44

四 非戦論と日露戦争 49

むすびにかえて 57

第三章 堺利彦の「ユートピア」——明治社会主義における「理想」の一断面……尾原宏之 65

はじめに 65

一 堺利彦のユートピア小説理解 66

二 家庭改良思想から社会主義へ 75

三 社会主義・共産主義・無政府主義 82

おわりに——「ユートピア」と社会への視座 89

第四章 二十世紀の少年からおぢさんへ——堺利彦における「言文一致」・「家庭」・「社会主義」

……梅森直之 96

はじめに 96

一 言文一致 99

二 家庭改良 104

三 社会主義 109

おわりに 116

第Ⅱ部 「冬の時代」を越えて

第五章 堺利彦と「冬の時代」……山泉進 124

はじめに 124

一	赤旗事件	125
二	大逆事件	129
三	堺利彦の遺家族慰問旅行	133
	おわりに	137
	第六章 堺利彦（枯川）、ふたたびの「熊野行」——遺家族慰安の旅の途中で……辻本雄一	139
	はじめに	139
一	「売文社」と奥栄一のこと	141
二	「自転車」で風を切って	145
三	堺利彦の「新宮行」	147
四	堺の遺家族慰安の旅	150
五	堺利彦の小品「まぼろし」	154
	第七章 『近代思想』にみられる大杉栄と堺利彦の距離……小松隆二	161
一	『近代思想』は大杉栄の最高の足跡の一つ	161
二	『近代思想』の残る課題——軽視される堺利彦の位置	165
三	第一次『近代思想』と堺利彦	167
四	冬の時代と堺利彦の位置——惰眠は本心ならず	171
五	堺利彦は次第に普通選挙重視へ	174

おわりに——労働者重視へ 175

第八章 雑誌『月刊』新社会』と階級論——中等階級・知識階級・流行文藝……木村政樹

179

一 問題の所在 179

二 社会主義者とその知識 181

三 堺利彦の「中等階級」論 185

四 「流行文藝」と「社会的傾向」 188

五 「知識階級」と「民衆藝術」 192

第九章 文学から、そして文学へ——堺利彦と一九一〇年代労働文学……大和田茂

202

はじめに 202

一 文士だった堺利彦 204

二 文学への不即不離 206

三 宮嶋資夫と宮地嘉六——純正労働文学と堺 213

四 中西伊之助と丹潔ほか——運動家にして労働文学作家と堺 218

おわりに 223

第一〇章 「公の政党」を守り抜いて——第一次日本共産党と堺利彦……黒川伊織

227

はじめに 227

一 「大同団結」を目指して 232

二	第一次日本共産党の成立前後	237
	おわりに	245

第Ⅲ部 無産戦線の統一と発展を目指して

第二章	プロレタリア文学の源流——堺利彦と「文芸戦線」系の人びと	252
一	「堺利彦氏を弔う」	252
二	マルクス主義の二つの潮流	261
三	幻の人、松本文雄	263
四	歴史の流れる方向に	270
第二章	『労農』同人時代の堺利彦	274
一	第一次日本共産党の後始末	274
二	分裂主義に対抗して	279
三	菊池寛、荒畑寒村と	283
四	東京市会議員に当選——政治活動の最盛期	287
五	山川の『労農』同人脱会をめぐる	290
六	総選挙に立候補	293
七	心身ともに無理が重なる晩年	296
	石河康国	274

八 戦争反対に斃れる 299

第一三章 都市構造転換期における堺利彦——選挙・市会活動・市民運動……成田龍一 302

はじめに 302

一 東京市会議員選挙への出馬 304

二 東京市会の無産市議として 317

おわりに 329

後ろ書き 332

第一四章 堺利彦農民労働学校——校舎建設運動を中心に……小正路淑泰 334

はじめに 334

一 校舎建設運動の胎動——堺利彦最後の闘い 338

二 校舎建設運動の展開——堺利彦「真実の遺言」 349

三 堺利彦農民労働学校の終焉 358

むすびにかえて 364

第IV部 資料紹介とエッセイ

第一五章 ユーモアの裏にあるペーソス——木下順二作「冬の時代」を観て……山中千春 378

第一六章 祖父・藤岡淳吉と堺利彦——彰考書院版『共産党宣言』をめぐる……中川右介 386

	第一章	《資料紹介》 堺利彦が恩師に謹呈した次兄・本吉欠伸肖像写真 ……	小正路淑泰	396
	第二章	《資料紹介》 堺利彦・堺真柄「帰郷雑筆」 ……	小正路淑泰	404
	第三章	わが町 ……	松本法子	428
	第二〇章	みやこ町歴史民俗博物館における堺利彦顕彰事業 ……	川本英紀	433
	〔エピローグ〕	パンとペン——堺利彦と「売文社」の闘い ……	黒岩比佐子	453
	一	「売文社」に関心を持ったきっかけ		453
	二	堺利彦の多彩な人物像		458
	三	売文社が誕生したきっかけ、大逆事件		462
	四	売文社の多彩な仕事		468
	五	売文社の社員たち		470
	六	堺利彦の幅広い人脈		474
		あとがき		478
		初出一覧		485
		執筆者紹介		488
		主要人名索引		508

第I部
初期社会主義の思想圏



有楽町平民社編集局、1904(明治37)年8月。テーブル左奥・幸徳秋水、その左・神崎順一、テーブル右奥から堺利彦、石川三四郎、西川光二郎、柿内武次郎。みやこ町歴史民俗博物館所蔵

緒言

堀切利高

堺利彦先生ハ明治三年旧十一月二十五日、豊前国豊津ニ生マレタ。夙ニ操觚界ニ入ツテ枯川ノ文名ヲ謳ワレ、後ニ社会主義者トナツタ。日露戦争開戦ノ危機ニ際シ敢然トシテ非戦論ヲ唱エ、幸徳秋水ト共ニ平民新聞ヲ創刊シタ。社会主義運動ガ実践期ニ入ツタノハ、実ニコノ時ニ始マル。

先生ハ明治、大正、昭和ノ三代ニワタリ、政府ノ弾圧ニ抗シ数次ノ入獄ニ屈セズ、社会党ノ組織、機関紙ノ発行、無産階級勢力ノ発展、民主主義精神ノ興隆ノタメニ、心血ヲソソイデ努力シタ。昭和六年ノ秋、満州事変オコルヤ、先生ハ寢食ヲ廢シテ反戦運動ニ盡瘁シ、ツイニ疾ヲ獲テ倒レ、八年一月二十三日東京ニ逝ク、享年六十四。

先生ノ生涯ハワガ国社会主義運動ノ歴史ヲ代表シ、就中、マルクス主義ノ確立ハ先生ヲ以テ



荒畑寒村（イス左）を囲む石本秀雄豊津町長（イス右）ら堺利彦顕彰会の会員たち。1975年12月。福岡県京都郡豊津町（当時）の堺利彦記念碑にて。塚本領氏提供

第一人者トスル。昭和三十五年十一月二十五日、先生ノ生地ヲ選ンデ記念ノ碑ヲ建テ、郷党ナラビニ後輩ガ追慕ノ意ヲ表ス。

昭和三十五年十一月 荒畑寒村記

〔『堺利彦顕彰会通信』創刊号・一九八一年一月二三日〕

本碑文は豊津の堺利彦顕彰記念碑のために書かれたもので、堺利彦の生涯を要約すればの見本をここに見るのだが、さて具体的に当たってみると、その活動は多岐にわたり、そのうえ刻々と変化発展し、なかなか一概には律しえない困難を感じる。理想を追いながらもきわめて現実的な、このしたたかな革命家。人間の魅力もふくめて、そこには大事な問題がいくつも隠されているような気がする。

第一章 幸徳秋水と堺枯川——平民社を支えたもの

山 泉 進

はじめに

平民社が結成されて一世紀が過ぎたことになる。その百年の記念号を本誌（『初期社会主義研究』）で特集することになるとは、二〇年前に本誌刊行の母体である初期社会主義研究会を立ち上げたときには、思いもよらなかつたことである。もつとも、研究会の事務所を神田神保町に置いてからは、それなりにこの年を迎えることに力を尽してきたし、とりわけ、二〇〇一年に「社会民主党百年」の記念事業を企画し、特集号を刊行してからは、それなりに懸命でもあった。やっとたどり着いたという安堵感もあるが、他方では、この秋に予定されている各地での記念集会やシンポジウムがうまくいくか心配でもある。また少し頓挫している『平民社百年コレクション』（全一三巻・論創社刊）の今後も不安である。平民社は、社会民主党の結成の場合とは違って、その創立をもって終

わりになるのではなくて、むしろその苦難の二年足らずの活動を評価しなければならぬことを考えれば、もう少しは頑張ってみようかとも思う。

それにしても、いつも考え続けていることは、「非戦論」を掲げ、政府や国家の政策と戦うために、生活を賭け、牢獄生活を余儀なくされた平民社に集った人たちと、いまいる私たちの位置の落差と
のことである。たとえば比較的身近なことでは、**「特攻隊」**となつて死ぬことは日常生活のなかにはおぼろしいことではあるが、戦争のなかのある特殊な状況のなかでは意外にむずかしいことではない、そう思ったのは、封鎖されたバリケードのなかのことであつた。しかし、国家のもつ死の装置の枠外において、死を賭けて自己の主張をおこなうこと、それは次元の異なる問題である。その落差のもつ**「ヘリアリテイ」**に迫ることなしに、平民社の活動を語ることはできない。平民社の活動は、野蛮なロシアに味方する国益を損なう行動であり、日本の植民地化をも容認する許しがたい暴挙である。『坂の上の雲』に描かれた栄光の明治国家を是認すれば、平民社を肯定するものは幼稚なヒューマニズムを除いては何ものをも残しはしない。このような論断に欠けているものは、戦争という**「ヘリアリテイ」**を捉える眼である。平民社は日露戦争と戦つたが、その戦争といわれるものが何であつたのか。「非戦論」は、日露の軍事的衝突に反対したばかりではなく、戦争そのものに反対した。幸徳秋水はいう、「非戦論の趣旨目的は極めて簡単也、曰く、速に現戦役の局を了して平和を克復せしめんと欲す、曰く、一般戦争の起因たる経済的競争の制度を变革して、将来の戦争を防遏ぼうあつせんとす、此両目的を達せんが為めに、世界万国に向つて、戦争の悲惨なること、損害なること、美事に非ざること、善事に非ざること、希ふべきに非ざることを絶叫す」〔非戦論

の目的」下、週刊『平民新聞』第五八号、一九〇四年二月一八日」と。戦時に発せられたこの言のなかに、思想と行動の（リアリティ）を読み取ることができないとすれば、平民社と私たちの位置との落差のなかにあるものを捉えることはできない。

歴史は、常に〈事後的〉に語られる。しかし、情熱と努力と才能とを無視して、歴史に自分の境遇を投影させるとしたら何の意味があるう。〈研究〉という防壁のなかにいて、過ぎ去った現象をなぞることに何の意味があるう。それでも、〈言葉〉だけは、かすかに過去の（リアリティ）に繋がっている。その〈言葉〉の重さを量ってみることに、あるいは思想や行動を〈言葉〉で量る方法を見出すこと。ありきたりの概念を拒絶しながら、そのありきたりの概念へと還ってくること。その事実を〈言葉〉で再現すること、落差を落差として認識すること、私の不安定な位置は、ただそれだけのことである。

ところで、百年前、幸徳秋水と堺利彦とが『万朝報』を退社し、平民社を結成し週刊『平民新聞』を創刊するにいたった経緯については、太田雅夫氏の論稿で十分に説明され、また本誌創刊号（一九〇六年一〇月）にも故絲屋寿雄氏が「平民社創立八十年」の明治大学南講堂での記念集会の講演をまとめられて掲載している。あるいは、本誌の購読者であれば、第八号（一九〇五年七月）の資料紹介欄で、堀切利高氏が堺利彦の「非戦論で萬朝報を退いた時の事」（「号外」一九二七年七月号）を紹介しながら、自転車に乗って駆け回る堺と幸徳の歴史的決断の時間を再現していることも承知のことであろう。したがって、私のここでの役割は、堺と幸徳とが、平民社へとたどり着く、精神的遍歴を追跡して紹介しておくことである。かれらは、自らを「社会主義者」として律して、人生

の選択をおこなった。そして、二人の遍歴から導かれた〈友情〉が平民社の活動を支えた。

あるいは、平民社の思想的源流からいえば、「平和主義」もしくは「非戦」思想の根拠を探求することが必要であろう。私自身は、平民社までの初期社会主義の思想的集約が一九〇一年五月に結成された社会民主党（宣言書）にあり、その延長線上に運動が始まり、それが平民社であったと認識している。平民社は社会民主党の理念を教訓的に——その意味は社会民主党が結党禁止処分を受けたことを指しているが——引き継いで出発した。その経過からみれば、「平和主義」の源流は、キリスト教的「人類同胞」主義にひとまずは還元して考えてみる必要があると考えている。そのことは、日本の初期社会主義思想の特質にかかわっている。「平和主義」の理念は、現実における政府による弾圧のなかで変容していく。それは、「社会主義」の理解の変容にもかかわっているのであるが、それは別の論考を必要とするところでもあろう。

以下の文章では、幸徳秋水と堺利彦とがどのような精神的動機をたどって「社会主義」に出会うことになるのかを分析している。私は、あえて対照的に描きだした。なお、この文章は、この秋（二〇〇三年）出版する予定の『平民社の時代——非戦の源流』（論創社）のために書き始めたものの一剖面である。それ自体が、あちこちに書き散らかしたものを拾い集めたものにしか過ぎないが、本特集のために役立てば、許されることでもあろう。

一 秋水の不平

幸徳秋水は、明治四（一八七二）年旧暦の九月二三日（新暦一月五日）、高知県の西南、今では清流で名高い四万十川の河口から四キロほどさかのぼった土佐の小京都と呼ばれる町、中村（現在、四万十市）で生れた。本名は伝次郎、生家は薬種商と酒造業を営む商家であった。誕生の翌年、父篤明が他界し、母多治により育てられた。

なお、秋水の号は、青年時代の師、中江兆民から与えられたもの、秋水の『兆民先生』（博文館、一九〇二年五月）にそのときの逸話が記されている。それによると、兆民は伝次郎に対して、ある朝訪ねてきた高利貸しを例にとつて、「彼れの因循いんじゆんにして不得要領（要領を得ないこと）なる、人をして煩悶はんもんに堪へざらしむ」ものがある。しかるに、かれは財をなしている。このように「処世の秘訣」は「朦朧もうろう」たるところにあるのである。ところが、おまえは「義理明白に過」ぎている。これを戒めるために号としては「春藹しゆんあい」とするがよい、と。これに対して伝次郎は、自分は「朦朧」ということは嫌いであるから、別の号にして欲しいと拒絶した。兆民は、「益々ますます笑ふて」いう、それならば「春藹」とは全く意味が反対である「秋水」という、自分が「壮時」に使っていた号を与えよう、と。伝次郎、「予喜んで賜を拝せり」と。前段には、兆民が革命家として、政治家として、実業家として、また文筆家として敗北した理由を、幸徳秋水は掲げている。そのなかには、「直情徑行けいじやうけいこう」を好んで「迂余曲折うよせきせつ」を憎んだこと、「義理明白ぎりめいびやく」を喜んで「曖昧模糊あいまいもこ」を嫌ったこと、直

ちに理想を実現しようとして社会を敵として激闘したこと、まさしく中江秋水としての失敗のことが録されているのである。それでも幸徳伝次郎は「秋水」に固執し、若き兆民のように主義と理想とにこだわった。兆民が示した「益々笑ふて」の意味するところは意外に深い（なお、飛鳥井雅道「中江篤介の「秋水」と幸徳伝次郎の「秋水」」、『初期社会主義研究』第一号、一九九八年二月参照）。

幼少時のエピソードや塾や学校生活のことなどは、ここでは省略して、平民社結成にいたるまでの必要な精神遍歴についてだけ触れることにしたい。秋水は、週刊『平民新聞』（第二〇号、一九〇四年一月一七日、以下ではたんに『平民新聞』と略すことがある）に掲載された「予は如何にして社会主義者となりし乎」において、社会主義者となった理由について「境遇と読書の二なり」と答え、「境遇」としては「土佐に生れて幼より自由平等説に心酔せし事」「維新後一家親戚の家道衰ふるを見て同情に堪へざりし事」「自身の学資なきことの口惜しくて運命の不公を感じし事」の三つをあげている。維新後、一時的に家業が振るわず、若くして寡婦となった母親の苦勞を身にしみて知っていること、さらには優秀な才能にめぐまれながらも生来病弱で勉学を継続する健康にもめぐまれなかったこと、さらには、母方の親戚にあたる一族の出世頭であった熊本県令、安岡良亮りょうすけが一八七六（明治九）年の神風連の乱において落命し、郷党社会のもつ出世への強い絆を失ってしまったこと、これらの境遇の不幸に対する「不平」が、伝次郎をして「自由」や「平等」というような理想的価値へと向かわせる精神的原動力となった。保安条例により東京を追放され帰郷したものの、再び出郷して大阪で中江兆民の玄関番となった時代、一八九九（明治三二）年、伝次郎満一七歳のときに書いた「後のかたみ」（塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書簡』増補決定版、未来社、一九九〇年四月所収）

は、この時代の精神遍歴の記録である。そのなかの五月一九日に書かれた一文に、「人は不平の動物なり。不平あればこそ人間の活動もあれ」と書き始められ、「予は稍物心つきし頃より、行往坐臥一日寸時も不平の雲霧に立掩はれざることなかりし」と書きつがれて、だいたひにおいて不平のある人間にも、それに相応する「満足」というものが伴っていることが世の中の常である。しかるに、「余は不平の為にはほとく此世にもあき果たれ共、未だ曾て人間の愉快得意満足等の語は爪の垢程も知らざる」状態であると告白している文章がある。若い年齢時の日記の類が、往々誇張された表現をとって自分を慰撫することがあるであろうが、それにしても伝次郎の「不平」の感じ方は尋常ではない。伝次郎はさらに、この「不平」の原因が何に由来するものであるかを自己考察して、「境遇」によるものか、「性質」からくるものかと問うている。その上で、「予は思ふに如何にも二者を兼ねたるが如し。若し然らんには実にも余は不幸中の不幸といふべし」との答えを発見するに至っている。伝次郎にとつて、「不平」は外的世界から強いられたものであるばかりではなく、内面世界にも由来するものであるとすると、そこからの出口をどこに求めればよいのか。平民社時代の秋水から振り返れば、その出口が「社会主義者」としての自分であるということに逆算できるのであるが、そこまでの道のりは、秋水自身がしばしば使用する表現のように「碌々」(石ころの多いさま)としたものであった。

たとえば、満二九歳の日記「時至録」においても、この「不平」のなかに閉塞された伝次郎の精神をみる事が出来る。一八九九(明治三二)年一二月二三日の記述である。少し長いが引用しておきたい。

積陰暗澹。年之に暮れんとして囊中一銭なし。古より貧は硯田に耕すもの、常なり。況して才疎にして志徒に大なるの我党をや。但た辛して米薪を支へ得るをもて幸ひとするのみ。左れど児女は之をもて憂ひとす。老ひたる母の善く我を知り玉へれど、昔し世路に誇りたりし時にくらべて今の不自由をかこつ愚痴の折にふれて出て玉へるは氣の毒なり。然り老たる人の氣の毒なれど、我は之を奈何ともするなければ唯た耳を掩ふのみ。妻ならば論しすべし、叱りもすべし、氣焰も吐くべし、母上に対しては我は曾て何事をも唯々として過ぎぬ。

明日枯川の子の葬に会すべき筈なれば、一日早く論説を呷せんとて机に向ひけるに、又家事經濟の相談出でぬ。我は母上に対しては断々として之を拒絶するの勇氣なきも、扱ては之を如何ともするなし。唯々として忍んで之を聞くのみにして、而も頭腦は全く俗殺され、文思四散して求むれども得ず。強て興を求めんとすれば不利益す湧く。遂に一行を草せずして筆を抛ち、酒を喚て痛飲すること数合。酔て欲をなさず、暗愁益す凝り凝りて忍ふことを得ず。母と妻に向つて放言高論を恣まにして家を出づ。欲を成さすと雖も而も酔甚し。殆ど昏倒せんとす。平生自ら度量の大を以て許す。以為らく、清濁併せ吞て余裕ありと。今に於て耻つ。区々の家事、強て酒を被て不平を遣らんとし、酔て却て怒罵を恣まにす、我はまことに小人なりき。

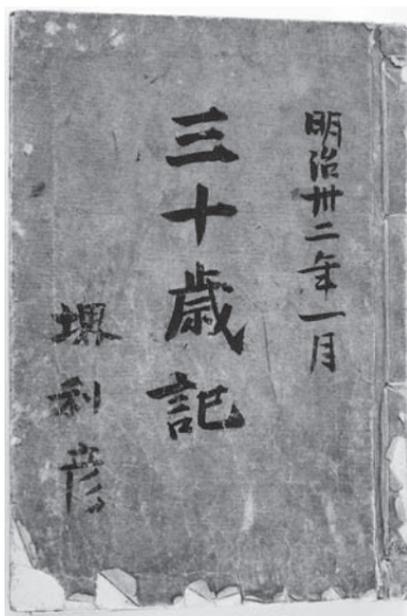
新聞社に行く。編輯局に入りて猶ほ放言高論す。一座予の大に酔へるを見て慰藉到らざるなく、鈴木省吾予を車に乗せて返らしむ。四時過ぎ帰る。頭腦昏々として殆ど人事弁せず。一二時間を経て未だ醒めず。又妻を拉して出づ。酔歩蹢躅八官町の川嶋に至りて又飲む。夜に入り

て雨蕭々たり。十二時に至り泥濘を歩して帰る。

酔て狂せる此日の如きはあらず。母は怒り玉ひしなるべし。妻は迷惑せしなるべし。不孝の子にして不仁の夫なりき。耻ぢざらんや。

文中に「不平」の言葉は二個所に登場する。幸徳にとつてここでの「不平」とは、他から強いられた克服できない不満足（家事を維持する収入不足に対する母親からの愚痴であろうが、金銭的問題以上に、反抗することが出来ない母親という存在そのもの）であるが、それを処理できない自分への不満も重なっている。酔うこと、それも我を忘れるほどに酔うこと、幸徳秋水には酒を飲むこと以外に出口を見つけられないこともあったのである。

ここでちよつと横道にはずれて、堺利彦のことに言及する。先の引用文中に、「明日枯川の子の葬に会すべき筈」との語句が出てきたからである。これは、この一月二日に堺利彦と美知子の長男、不二彦が二歳にして亡くなったときの葬儀のことを指している。生まれつき病弱であった不二彦が嘔吐を催すようになるのが、この年の八月下旬、二七日には脳膜炎と診断される。二八日の「三十歳記」には、「ひきつける時は今にも死にさうにて見るに忍びざる心地す、美知は其間に又胃痛を起して苦む、昨日の我家は実に慘憺たるものなりき」（『堺利彦全集』第一卷、中央公論社、一九三三年五月所収）とある。二九日、「午後不二稍危篤に陥る、痙攣しばく至る、（中略）彼のいたづら者が、今は只平臥して語らず笑はず動かざるを思へば、親の心は断絶せんとする也、嗚呼終に子を失ふの感を経験せんとするか」、三〇日「不二いよく危篤也、熱は却つて減じたれども脈搏



堺利彦『三十歳記』。みやこ町歴史民俗博物館所蔵

微にして呼吸亦小也、時々痙攣を起す、齒は食ひしぼりて物を飲むを好まず、蓋し命今日の中に迫れる也、如何ともすべからず、美知は傍に在りて時々泣す、嗚呼此の如きもの我等夫婦の運命なるか。九月二日、東京病院に入院、一日の入院諸経費は三円五〇銭ほどかかる。堺、四〇円の月給のころである、金は毛利家編集所の仕事を終えた時に頂戴した千円のわずかな余り金をあてがった。「あるほどの金は使ひ尽してもよし、二ヶ月前の身と思へば、貧には馴れたる我等なり、さまで苦にする事もあらず」、これもこの日の記述。「三十歳記」には、以後、不二彦の病状の一進一退が綴られている。一〇月四日「不二猶依然たり、金は已に尽きたり」、同一日「不二は家に帰りたり、(中略)社より五十円借入の約を為す、今日請取る筈也」、同一

二日「不二の泣声を隣室に聞けば、書を読むも文を作るも、心おちつかず、いつまで斯くてあるらん、堪へがたき心地す」、一二月に入り九日「不二、依然たり、医者はい危篤々々といふ、猶牛乳二合余を飲む、其顔の瘦せて実に骨と皮とのみなるを見るが辛し」、そして二二日の記述、「午前九時十分不二彦終に死す、些の苦

痛の状なし、美知など今更に打泣く也、嗚呼二年間の一夢也」と。葬儀は二四日、「午前八時出棺、同十時白金重秀寺に着し式を行ふ、不二も生きたる時幾度か此寺に來し事ある也（中略）夜、人去り、事了り、家内寂寥、只情に堪へざるを覚ゆ」、幸徳秋水は葬儀に参列する予定で、泥酔果たせず、ただ詫状を堺に書いた。二五日、堺の日記には「幸徳秋水の書至る、秋水不平痛心の事あり、我家の葬儀に列せざるを謝する也、嗚呼好男子、家庭の平和を得ず、氣の毒に堪へざる也」とある。

不二彦危篤中の九月二四日、幸徳は堺と面談している。幸徳の「時至録」には「夜堺利彦來る。例の処世論を為す。九時去る」とだけある。「処世論」の内容は推測するほかないが、他方、堺の「三十歳記」には秋水の言が記されている、「昨夜、秋水と語る、秋水も亦功名に急なる者也、彼外交史を著さんと欲して出版書肆なきを憤る、曰く、是れ予が無名なる故也と、名を得んが為めに書を著さんと欲すれども名なきが為に出版するを得ず」と。「も亦」とある点は、一三日記述の、「我万朝社に入りて已に百日ならんとす、そもく何事を為したる乎、兎の病に妨げらるゝとは雖も、自ら忸怩たらざるばあらず」との胸中を受けてのことである。ここでの「功名」とは社会的評価の手前にある社会的認知のことであり、世の中を生きていくための生活基盤の安定という意味で、その点を指して「処世論」と秋水は呼んだのであろう。結婚し家庭をもった二人の男が、三〇歳を前にして、一流の新聞社に職を得たものの、自分の力を十全に出し切つて、文筆家として認知されるような著作の機会が与えられていない。そのことに對する不満と不平には共通するものがあつた。ただ、秋水と枯川は違つていた。堺によれば、「無名」であるが故に機会が与えられないと「不平」をいうことは、資本が無いが故に商売ができないということと同じである。「秋水亦誤れる所ある

を免れず」と。機会の有無を嘆くのではなくて、まず「実力」を養って、それから「知己友人」を得ていくことしかないのであると、こう堺は批判するのである。著作はその内容の価値において認められる必要があるとする幸徳と、ある程度の独自性ができれば人間関係のなかで仕事が出来ていくと考えている堺との違いなのか、あるいは、その著作に対する自信における違いの差異なのか。

二 秋水の社会主義

ところで、幸徳秋水は、その翌二五日の日記には、「社会主義研究会の事に付村井知至ともよしへ手紙出す」の語句を記している。このとき、秋水は前年に結成された社会主義研究会に参加し、このころには社会主義に対する関心をぐっとふかめていたのである。「日清戦争終結を告げて、社会運動の舞台は開かれぬ」とは、後の日刊『平民新聞』に「日本社会主義史」を連載した石川三四郎の言であるが、一八九七（明治三〇）年、東京帝国大学教授の桑田熊蔵、山崎覚次郎らを中心にして社会政策学会が組織され、同時期に中村太八郎らの尽力で民間にあつても社会問題研究会が発足している。秋水は、石川安次郎（半山）に誘われて社会問題研究会に名前を連ねている。他方、労働組合運動にも関心が寄せられ、アメリカにおいてゴンパースと交遊をもった高野房太郎、城常太郎らが職工義友会を組織し「職工諸君に寄す」のビラを配布した。同じ年七月には高野を幹事長にして労働組合期成会が結成され、一二月には片山潜が主筆となつて『労働世界』が発刊された。翌一八九八年には、アメリカで社会学を学んだ高木正義が中心になり加藤弘之を会長に頂いて社会学研究会がつ

くられた。そして、一〇月には社会主義研究会が結成された。この会は、「社会主義ノ原理ト之ヲ日本ニ応用スルノ可否ヲ考究スルヲ目的トス」としたもので、同志社出身でアメリカの神学校において社会主義を学んだ村井知至が会長、豊崎善之助が幹事に選出された。幸徳秋水は『万朝報』（一月一八日、一九日号）に掲載した「社会腐敗の原因と其救治」^{その}がきっかけで入会する。秋水の「社会主義史について」（日刊『平民新聞』一九〇七年三月一九日）には、「即日村井、片山二氏連名の端書^{がき}を以て社会主義研究会設立の旨を報じ、且つ予の入会を勧誘し来れり、予喜んで之に応じ同月廿日芝ユニテリアン惟一館の図書室に開ける同会に赴けり」とある。このとき、秋水は安部磯雄や片山潜らと面識となった。これを見てわかるように、日本における社会主義思想の紹介において、秋水は先頭を走っていたのではなく、むしろキリスト教徒であった村井、安部、片山などの後を追って社会主義を受け入れるようになるのである。

ここで先に紹介した秋水の「予は如何にして社会主義者となりし乎」にかえれば、「境遇」と並んで掲げられていた「読書」として、「孟子、欧州の革命史、兆民先生の三酔人経綸問答、ヘンリーチョーヂの『社会問題』及『進歩と貧窮』を挙げている。そのうえで、「左れど^よ予は社会主義者なり」と明白に断言し得たるは、今より六七年前初めてシヤフレの『社会主義神髓』を読みたる時なり」と答えている。シヤフレ (Schäffle, A.E.F.) はドイツの講壇社会主義者として分類されている人物であるが、その英語版 (ドイツ語版は一八七九年刊行) の *The Quintessence of Socialism* を読んだときは、「六七年前」を信用すれば、一八九八年か一八九九年の社会主義研究会に入会したころのことになる。「時至録」の一八九八年二月、秋水は依然として政界工作に奔走しているが、

四日「朝論文を呷す。蕨村けつそんより「天地人」雑誌の文を評せよと申こしたれば其を攻撃せしなり」との記があり、その論説は『万朝報』（一八九八年二月五日）に「社会主義の呼号に就て」として掲載された。久津見は社会主義に反対し、その理由として、平等の主張は「天然」に反するとしてののに対し、秋水は社会が平等へと向かっていることこそ自然の趨勢であり、「社会主義の神髄は経済的問題也」と反論を加えている。社会主義者の立場から内政外交を論じるようになるには、まだ時間が必要であるが、この時期に「不平」を精神的原動力に変えて、「自由」「平等」「平和」という光明に向かつて歩みだそうとしていたことは確かである。

三 枯川の不安

堺利彦は、旧暦の明治三（一八七〇）年一月二五日に生れた。新暦に直すと明治四年一月一五日になり、幸徳秋水とは同年生れになってしまいが、堺からすれば秋水はやはり一歳年下と認識されていた。出生地については、豊前国（福岡県）仲津郡松坂、堺は一九一一年四月帰郷の折のことを連載した「故郷の青葉」（『二六新報』一九一一年六月一九日、八月一九日号）でそのことに触れているが、他の自伝、「子の半生」（『半生の墓』平民書房、一九〇五年八月）や『堺利彦伝』（改造社、一九二六年九月）ではそのことに触れていない。いや、『堺利彦伝』では、一八八六（明治一九）年春まで育ち、小学校、中学校を卒業した京都みやこ郡豊津を、「日本国中で只つた一つの、如何なる物にも代へがたい懐かしの故郷」とさえよんでいる。満四〇歳を前にして「大逆事件」で刑死した幸徳

秋水が故郷、中村の思い出を「不平」の一齣としてしか語る暇がなかったのに対し、堺は豊津に愛着をもち、郷里の思い出を何度か筆にして残した。父の家は豊前小倉の城主、小笠原につかえる一五石四人扶持の士族であり、明治維新の際に長州軍に小倉を攻められて、殿様とともに逃げ延びた先が豊津の高原であったのである。「郷党の秀才」が「笈を負うて」上京したのは、満で数えればまだ一五歳の春、一年と少しの勉学の後、見事、最高のエリート学校であった第一高等中学校（後の旧制第一高等学校）に入學した。『堺利彦伝』では、第一高等中学校は大学予備門として、「当時日本に只つた一つの『大学』に進む、只つた一つの道」であったと説明している。ここまでは、全くの順風であったが、伝次郎が大阪で兆民の家僕となっていた一八八九（明治二二）年二月、大日本憲法が發布されたときには、「予は悪友と共に頻りに酒を行つて氣を吐いて居た」という。学校の方も月謝未納で除籍、「それより後、予は殆んど着る物もなく、古洋服を纏うて破靴を穿ち、一定の宿所もなき程の身の上となつた」と、「予の半生」には記している。その理由は、悪友だとか、酒だとか、吉原遊びとか、あるいは文学だとか説明されているが、それらは現象的な原因であるにしても本質的な原因であるとは思えない。ただ「予の半生」の簡潔な記述を読むかぎり、立身出世による「功名」を求めている自分が、宇宙の存在からみれば「極微」なる存在でしかなく、その生を生きるということに空虚感を抱いたこと、そんな平凡な自己分析しかできない。後に『堺利彦伝』では「心の寂しさ」として整理されている。おそらく、堺自身、この心の奥底にあったものをよく説明できなかったのではなからうか。いまならば、青年期に特有の、誰にでも起りうる社会化の過程における反抗や逸脱の一形態として説明されて片付けられることではあるが、それは、家庭と

学校という人間集団を介してのこと、堺のケースに適応可能なのだろうか。

私は、堺利彦をして社会主義へと向かわせた精神的原動力を「不安」にあつたと解釈している。もちろん、秋水の精神的原動力を「不平」に見て、それとの対比において差異化してのことである。そして、この「不安」は身近な人間の死からもたらされている。さて、最初の近親者の死は一八八九年におきた長兄平太郎の急性腹膜炎による急死であつた。そのとき小倉に帰つた利彦、「放蕩の子、墮落の子、失敗の子を、老いたる父母は矢張り喜んで迎へてくれた」。小倉の国立銀行に勤め、父母の最後の世話をしていた堺家の嘱望された相続人の死は、堺利彦の身にも変化をもたらしした。次兄乙槌おつちは文学を志して大阪にいたが、養子に入り子供までいる身、結局養子先（一五歳のとき中村家の養子になつていた）からも離縁された利彦が、堺家を相続して、父母を引き取ることになつた。こうして、この年の夏、文学志願の意もあつた堺は、次兄の影響もあり大阪に出て、天王寺高等小學校の英語の教師に職を得た。足掛け四年の教員生活をここで過ごすことになるが、この時期、「予の心中の煩悶は実に甚だしい。不平、不平と云つては酒ばかり飲んで居た」と回想している。青年の「不平」は幸徳にも通じているが、堺の「不平」は、最高のエリート階段を踏み外したことからくるものであつた。後、『大阪毎朝新聞』、国民協会の機関紙『新浪華』などの記者としての職を得るが、かたわら西村天囚を中心とした浪華文学会に入り小説などを発表している。枯川の号は大阪の浪華文学会の同人誌『なにはがた』に小説や翻訳を掲載したときから使用されるようになる。

二番目の死は母親の死である。一八九五年二月のことであつた。「予の半生」には、「是は実に予の頂門の大打撃であつた。予は非常なる恐れを感じた。不幸といふ感が痛切に湧いて来た。此の五

六年の甚だしき貧乏ぐらしの間に、不安と寂寥とを味はひ尽させて、六十七になる母と七十になる父とを、何時まで生きるものと思つて居たやら、予は今更に眼の覚めた心地がした」との感慨が記されている。そして、もう一つ大阪時代のこと、ここで書き落とすことができないこと、それは「放縦なる生活」のあいだの、ただ一つの「真摯なる恋」、そして家族の反対のなかでの「将来を約して」いた恋人の死のことである。現在では、浦橋秀子と推定されている恋人の死が、堺利彦の心の底に近親者の死として残っていくことは、また後にみることになる。『堺利彦伝』には、「蜚一つ、闇に吞まれて消えにける」との句が添えられてある。やはり第三番目の近親者の死に数えてよいであろう（竹田行之「蜚ひとつ……」『初期社会主義研究』第一号、一九九八年一二月）。

一八九五（明治二八）年九月、母の死を機に、堺利彦は父親を連れて上京した。その死からほどないころ、次兄は上京し『都新聞』に職を得ていたので、その下宿へ転げ込んだのである。当時の『都新聞』の主筆は田川大吉郎、その田川が新聞（『実業新聞』）を創刊するというので、次兄が弟の就職を願ひ出て職を得たことが堺上京の理由になった。ところが、ここでもまた死を経験する。つまり、翌一八九六年二月、新富町の駿河屋という下宿屋で囲碁の最中に脳卒中で突然に父親が他界したのである。父を失った感慨をまた、堺は「予の半生」に記している、「予は云ふに云はれぬ悲哀と苦痛とを感じた。七十に余る老いたる父を何時までも下宿屋の一室に置いて、寂しい／＼朝夕を送らせ、僅に一合がかりの好きな寝酒をも思ふ様には成らせずして、そしてトウ／＼死なせてしまった」云々と。これが近親者の四番目の死となる。

ところで、このころ、先に引用した「三十歳記」に登場した永島永洲、藤田天涯（藤太）らと落

葉社と名づけた文学仲間の会をつくつていた。父の死から二ヶ月ほどして、堺は落葉社の会員であつた堀紫山の妹、美知子と結婚した。このとき、堺は失業中であつた。やがて、『福岡日日新聞』に就職が見つかり、かくして「五月の初、予等夫妻はサモ新婚旅行然として福岡に下つた」、これは堺の言葉。さて、美知子という妻を得て、堺利彦の生活は一変する。少し「予が半生」より引用する。堺が「社会改良」に関心を持つようになり、その基本を「家庭改良」に見た、その発想の实感がここにあるからである。

福岡に着いて、予等新婚の夫婦は頗る平和なる小家庭を作つた。犬あり、猫あり、花あり、庭あり、月給少しと雖も兎もかくも楽に暮せるのだ。而して此の平和なる家庭生活の間に於て、予の心には革命が起りかけた。

父母の死に依りて予が受けたる大打撃の跡は、此時更に烈しく痛みはじめた。過去七年の放縦なりし我が生活を思ふに、血に染み埃に塗れ、衣裂け髪乱れ、或は酔うて路傍に仆れ、或は怒つて人を罵るが如き我が姿の、あり／＼と目に見える心地がする。而して其の間に於て父母を苦め尽して遂に死に至らしめたる事を思へば、我ながら実に愛憎の尽きた、憎むべく、賤むべき、浅ましこの身であるのだ。予は白日独り机に倚つて是等の感想に耽り、背にも腋にも冷汗を流し尽して、遂に堪へずして歔歔流涕に沈み、妻の訝りを招いた事も幾度もある。

こうして、家庭の「和楽」を得て、一八九七（明治三〇）年、一年足らずして東京に帰ってくる。

その後の二年間ほどは、防長回天史編集の仕事に携わり、生活的には安定した時期であった。もつとも、将来の職業選択については迷うところがあったが、「教育文学者、道義文学者、宗教文学者、是れ望ましきもの、の第一か」などと「三十歳記」に記したのは、まだ二年程先のことである。しかし、この間、また近親者の死に出会っている。兄乙槌おつち（欠伸けつしん）の死である。堺は「予の半生」にいう、「予の兄は前年来、故あつて其の妻と子とに別れ、再び堺姓に復して居たが、其の放縦にして檢束なき生活は、遂に肺結核を其身に招くに至つた。而して明治三〇年八月十日、三十三歳を以て予の家に長逝した。彼は予の兄であると同時に、又予の文学の師であつた、而して又予の最親の友の一人であつた」と。しかし、他方で長男、不二彦が誕生し多少のバランスはとれたのであろう。しかし、さきに紹介したようにまたしてもこの長男の病気に出会い、また死に出会う。一八九九年、『万朝報』に入社した年の暮、一二月のことであつた。「予の半生」には次のようにある、「不二彦の病氣は予をして又少しく酒を飲ました。然しながら彼れの死は予をして全く煙草を禁ぜしめた。是より先、予は屢々禁煙を企て、失敗して居たが、彼れの死は遂に予をして最後の勝利を得せしめた。先づ母を失ひ、次に父を失ひ、次に又兄を失ひ、而して今茲こゝに子を失へるは予は、種々の感慨、実に禁ずること能はざるものがあつた」と。子供の死は、また妻美知子の病氣へとつながつた。堺は「美知子は殆んど失望を極めて居た」と書き留めている。そして翌年八月「甚だ弱れり」、美知は転地のため鎌倉に移り住むようになる。

一九〇〇（明治三三）年の六、七月は「北清事変」に従軍して中国へ、このころから「風俗改良」、「社会改良」に自分の領域を見つけ始めていく。八月二三日の日記には、「風俗改良案といふもの

を朝報紙上にのせはじめたり、何でも書いて居れば幾らか愉快也」との文章が見える。一九〇一年は二十世紀の幕開け、五月には日本で最初の社会主義政党である社会民主党が誕生、たちまち禁止された。日記の五月二〇日の項には、社会民主党のことが記され、「予も入党する筈であつたが、今日内務大臣から結社を禁止せられた」とある。堺は、週末には美知子の転地先の鎌倉へ出かけることが多く、意はあつても設立準備会などに参加し、創立者に名前を連ねることができる状況にはなかつた。その直後、五月二二日の日記は、悲惨である。妻、美知子の病気が「肺炎はいせんかたる」と診断されたからである。もちろん、当時「肺病」は不治の病とされ死亡通知を受けたと同じことであつた。日記にいう、「秀子も肺病で死んだ、欠伸居士も肺病で死んだ、ミチも肺病で死ぬるか知らん、死ぬるなら死んでしまへ、おれは此の世の中に独りになるのだ。／両親の死んだのは仕方がないが、兄が二人死ぬる、スキートハートが死ぬる、子が死ぬる、親友も少からず死ぬる、そうして終に女房も死にさうになつてゐる、此の次には自分が死ぬるまでの事だ」、「これから先、ミチの病中、二年か三年か五年か知らぬけれど、予は全くミチを養ふために働かうと思ふ、予の功名心は其の跡で満足させればよい、予が国家社会のために働くべき事があるならば、やはり其の跡で働けばよい」と引用文頭に登場する「秀子」は、大阪時代の「螢ひとつ」の浦橋秀子のことである。それでも、この日の朝、防長回天史編集所時代の上司であり、当時の内務大臣であつた末松謙澄を訪ね、社会民主党禁止の理由を聞いている。

私は、堺利彦が社会主義者になつていく、つまり「社会主義」を受け入れる精神的原動力となつたものが「不安」にあり、その「不安」は数多い近親者の死に遭遇したことから起つたものである

との仮説をたてた。その「不安」を解消してくれるものこそ、「親愛」と「和楽」に満ちた、堺が手に入れることが出来なかつた「家庭」であつた。しかも、「社会改良」によつて理想化された「家庭」であつた。この歳、六月二〇日の日記には、「秋水との交、近年やうやく面白くなつて来た」との言が登場する。秋水は、社会民主党の六名の創立者の一人として社会民主党の結成に参加した。しかも新聞紙条例により『万朝報』他の「宣言書」を掲載した新聞が発売禁止処分をうけ、そのことが全国の多くの新聞に掲載され予想外の反響をうけて、秋水の名前も世に知られることになつた。堺は、秋水と社会民主党の結成のことを介して急速に親密さを増したのである。そして、七月、黒岩涙香が音頭をとつて理想団が結成される。涙香が執筆した「平和なる檄文」(『万朝報』七月二日)には、「腐れ傾かんとする」社会の「改善」が必要であり、「社会改良の理想を以て合する団衆」として理想団を設立することが謳われている。「団衆」には「コムニティ」のルビが振られているが、まずは、各人が「私利私心」を排し「公義の心」を養うことが必要であり、さらにこの団体の組織や運営自体を理想的におこない、拡大化させることによつて社会全体の改良を目指せうとしたのである。もちろん、理想団は、堺の考えるところと大きな違いはない。七月一日の日記に、「黒岩周六、明日の万朝報の紙上で理想団の宣言書を發表してゐる、至極おもしろい」と記している。堺利彦も幸徳秋水も發起人に名前を連ねた。

四 枯川の社会主義

ところで、「予の半生」には、五月の社会民主党結成のときには、「予は当時まだ明白なる社会主義者となつて居らなんだ」と書き、七月の理想団の結成時には、「予は既に社会主義者たることを告白して居た」と記している。この二ヶの間に何があつたのか。「予は如何にして社会主義者となりし乎」（『平民新聞』第八号、一九〇四年一月三日）には、堺の思想遍歴が記録されている。それによると、まず儒教思想から自由民権思想、それから忠君愛国思想（これは大阪時代の国民協会のこと）、耶蘇教の思想、進化論の思想、功利主義の思想などがごちゃ混ぜに入り、「予の頭の中には大混雑が生じて、常に不安の念を抱いて居た」という状態であつた。ここでの「不安の念」は、もちろん思想的な核心が得られないことへの焦りであろうが、それは近親者の相次ぐ死からくる精神的不安に根ざすものでもあつた。さらにいう、「其不安の間に社会主義の新しき響が幽かに聞えたので、^{かつし}渴者の水を飲を求むるが如くに直に之に赴いた」と。そして、最初に読んだ本が、「フレンチ、エンド、ゼルマン、ソシアリズム」で、この本によりフランス革命以後、社会主義が生れてくるまでの過程を「初めて善く呑込んだ」、そして、「予は此に一道の光明を得た」と。「予は此光明に依て予の頭の中に在る総ての思想を照して見た、それで終に大混雑の思想が整頓して、影もなく、暗も無く、もつれも無く、一理貫徹、先づは安心を得た積りである」と。ところで、日記には、「フレンチ、エンド、ゼルマン、ソシアリズム」のことは六月二六日の項に登場する、丸善で購入したの

である。French and German Socialism in Modern Times (N.Y., London, 1883) は、アメリカのキリスト教社会主義者で経済学者でもあった Richard T. Ely の著作であり、日本でも、社会民主党の六名の創立者の一人として名前を連ねた、河上清が翻訳し田島錦治著として東華堂（一八九七年一月）から出版されていた。後には、『近世社会主義論』（法曹閣書院、一九一九年五月）として再版され、このときには、「リチャード・イリー教授原著、河上清先生訳述、田島錦治先生補闕」と明記された。内容は全一四章で、フランス革命と労働者階級、バブーフ、カペー、サンシモン、フーリエ、ルイブラン、ブルードン、ブルードン以降のフランス社会主義、ここまでがフランスに関係すること、以下は、ロドベルトス、カール・マルクス、国際労働者協会、フェルゼナンド・ラサール、社会民主党的思想、ラサール没後の社会民主主義、講壇社会主義、キリスト教社会主義、として主としてドイツの社会主義を取り扱い、全体としてはフランスとドイツを中心に社会主義思想の形成と運動を俯瞰した書物であった。幸徳秋水、河上清ら『万朝報』同僚による社会民主党結党のことがあり、末松内相からはドイツでの社会主義者弾圧の歴史を聞かされ、身近にあった社会主義について、イリーの著作を購入し粗読した時点で、社会主義を理想としようと堺は確信したのである。というのも、二七三頁もあるこの本（こゝ）では、Harper and Brothers Publishers 出版の一八八三年版を参照している）を理想団発表まで一週間もない時間で精読できたとは思えないからである。もうひとつ付け加えれば、この六月二六日の日記には後の理想団に関係する記述が見られる。「朝報社に談話会が出来た、元は内村、山縣、斯波の三人の会であつたが、それに幸徳が加はり、黒岩が引張りだされ、予も其の数に入つて、やうやく面白さうな会となつた、毎月二度づゝやるのである、今のも

やうでは、此の会が朝報社新運動の動力となつてゐる、ツマリは内村の勢力である、黒岩といふ人、終始そばから暖ためてゐれば火がもえる、火は元來あるのだけれど燃料は外から持つて行かねばならぬ」云々と。「内村」「山縣」「斯波」は、それぞれ内村鑑三、山縣五十雄、斯波貞吉のこと、いずれも『万朝報』の記者であつたことは本文の通り、この堺の書いてゐるところを背景におけば、黒岩の「宣言書」についても面白く読める。

さて、こうして理想団結成の時点では、「社会主義者」であることを朝報社内内部では「告白」していたのであるが、社会主義そのものに言及していくには多少の年月を要した。七月一日、先に引用した「明日の万朝報の紙上で理想団の宣言書」云々の同じ日、「今朝から『家庭の新風味』を書きはじめた、五六冊のセリイスにするつもり、うまく行けばよいが」の記述が日記にみえる。「新風味」というようなタイトルからして、堺が「告白」した「社会主義者」の著作として執筆し始めたものとは思えない。これまで述べてきたことからわかるように、シリーズの内容は、「不安」の精神的解消を理想的な「家庭」に求めようとするモチーフによって組み立てられてゐる。その意味で、堺の家庭論はきわめてユートピア性をもつてゐる。この家庭は「中等社会」という隔離された島のなかに存在する。死と病気による家庭崩壊という堺自身の現実の対極に描き出された、堺にとって憧れの家庭であつた。この点こそが、堺において「家庭改良」を「社会主義」へと貫通させていく最大のモメントであつたといえる。『家庭の新風味』の最終冊である第六冊は「家庭の教育」と題されているが、一九〇二（明治三五）年九月に刊行されている。その結語の部分では、家庭が「理想社会の雛形」であるとして次のように言つてゐる。現実の国家は、対外的には「血まみれの戦争」

をおこない、国内的にも強盗、殺人、詐欺、賄賂等々の「無数の悪徳」が栄えている。この汚れた現実のなかに「只一つ」だけ、奇麗な、清潔な、平和な、愉快な、安気な、小さな組合がある、それは家庭であると。続けていう、「此家庭に於ては、夫は我身を思ふ如く妻を思ひ、妻は我身を思ふ如く夫を思ひ、親は我身を忘れて子を思ひ、家族は互に我儘を控へて人の利便を計る。実に是れ理想の交りである」と。そこから社会の将来へと言及していく、「社会の人が総て夫婦、親子、家族の如く相愛し、相譲つて共同生活を営むのが、即ち理想の社会であらう」と。そうであるならば、「今の家庭」が「理想社会」の「雛形」、むしろ「種」となり「芽」ともなるべきものであり、「此家庭より漸々に発育成長して、終に全社会に及ぼすべきものである」という主張につながっていく。ここでは、社会主義という言葉は使われていないものの、あきらかに「社会主義者」としての立場が反映されているとみることができる。

現実生活の面から見れば、『家庭の新風味』は、美知子の鎌倉での療養生活をまかなうために経済的に必要な仕事でもあった。一九〇二年春、経済的負担を軽減するためと、美知子の健康がやや回復したことにより、美知子は鎌倉を引き上げ、淀橋町角筈に同居することになった。堺はここから自転車で朝報社へと通う。一九〇三年一月、長女真柄まがら誕生、四月には由分社を起し『家庭雑誌』を創刊する。「子の半生」には、「此頃より、子の社会主義に対する熱心は急に其度を強めて来た」とある。そして、「妻の健康も幸福も犠牲にして、取えて此の主義の為に働かうと云ふ事になつた。子の妻も亦た寧ろそれに満足して居た」と方針転換の事実を記している。当時の社会状況のなかで、「社会主義者」であることを選択することは、同時に啓蒙のための運動に従事するということであ

り、また社会的不利益を蒙ることを覚悟しなければならぬということでもあった。こうして社会主義者、堺利彦が誕生するに至るのであるが、「理想社会の雛形」としての家庭へのこだわりが、堺利彦の社会主義者としての独自性をなし、その独自性は近親者の死による「不安」からの脱出という精神的動機に裏付けられたものであったとするのが私の見解なのである。

おわりに

秋水の「不平」、枯川の「不安」、その克服のための「社会主義」との出会い、いささかシエーマ的過ぎることは承知している。「不平」は外へと向かい攻撃的となり、「不安」は内へと向かい閉鎖的となる。そして、「不平」は壁にはじかれて「不安」へと変わり、「不安」は壁にはじかれて「不平」へと変わる。二つの概念は対極的であり、また補足的でもある。秋水と枯川とを結びつけたものが何であったのか、平民社を支えた彼らの精神的紐帯はどこにあったのか。この問いかけがこの論考の出発点になっている。私としては、むしろ異なる精神的動機が、強い一体感をつくりだしたのだ、といたいのであるが、そんな解釈はどうでもいいのかもしれない。こう書いてきて、秋水と枯川の〈言葉〉のむこうにある〈リアリティ〉に少しだけ触れることができたと感じられたから、私としてはそれで満足なのである。

堺利彦・葉山嘉樹・鶴田和也の三人の偉業を顕彰する会

〈連絡先〉

みやこ町歴史民俗博物館

〒824-0121 福岡県京都郡みやこ町豊津 1122 番地 13

TEL 0930-33-4666

FAX 0930-33-4667

堺利彦——初期社会主義の思想圏

2016年6月20日 初版第1刷印刷

2016年6月25日 初版第1刷発行

編著者 小正路 淑泰

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1544-2 ©2016 Koshouji Yoshiyasu, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。